教育思想と〈習俗〉

河合　務　KAWAI Tsutomu
（准教授・発達科学講座）

Educational Thought and "Customs"

キーワード：教育思想 educational thought，〈習俗〉customs，習慣 habitus，生活 living

はじめに

本稿では、教育思想の研究において〈習俗〉という概念のもつ意味を検討してみたい。筆者が担当している学部1回生向け講義「教育思想研究」の受講者は、小学校に入学して以来、自らの経験から各々の教育観をもっている。そうした経験的実感としての教育観を大事にしながら、「教育とは何か」という問いへと思考を開いていく際に、〈習俗〉への注目が改めて重要性をもつのではないかと感じている。以下にみていくように、これまでにも〈習俗〉を鍵概念とする教育思想の探求は行われてきている。本稿では教育思想研究における〈習俗〉の意味を再検討することを主題とし、国内外の先達の学的営為を整理していくことを試みたい。

1．戦前日本における〈習俗〉への注目

—勝田守一の場合—

教育学者・勝田守一（しゅいち）（1908-1969）が論文「習俗と道徳」を『信濃教育』に発表したのは1939年である[1]。民俗学者・柳田国男（1875-1962）が『産育習俗語彙』[2]を上梓したのが1935年のことであり、ほぼ同時代にあたる。「小児が初めてこの人生に御目見えしてから、いよいよ一人前として世の中へ出るまでの間、一家一門一郷の人々から、どんな待遇を受けるのが普通であるか」[3]を明らかにする観点から各地の〈習俗〉について特に産育に関する「用語」に注目して探求しようとしたのが柳田の『産育習俗語彙』である。

勝田に対する柳田の直接的な影響はここでの問題ではない。勝田はドイツの哲学者シェリング（1775-1854）の研究者としてスタートし、1942年から文部省に勤務し戦後初期の公民教育・社会科教育の策定に尽力している[4]。論文「習俗と道徳」において勝田は〈習俗〉を「社会に生きる個人の感情のはたらき方や物の考え方や行為の仕方を予め定める拘束力をもった型」[5]と定義している。社会生活の地盤としての〈習俗〉に個人が反抗する際に示される世間からの「白眼視」、さらには「礼儀知らず」「義理を欠く」といった一種の「ののしり」に象徴される「拘束性」こそ〈習俗〉の本質的特徴であると勝田は捉えている。また、こうした〈習俗〉は、個人の習慣を規定し「肉体的精神的な傾向」となる。そのうえで勝田は、共通な個人の習慣が集まって〈習俗〉ができるのではなく、逆に〈習俗〉が個人の同化を促進し、習慣を形成することに注目している。〈習俗〉は社会生活の維持のために働き、どちらかといえば保守的である。

しかし、社会生活の変動期においては〈習俗〉の相克が不可避となる。おそらく幕末や明治維新のような時期が主要に念頭に置かれているのだが、身分制の打破、外国との交流が盛んになってくる場合には〈習俗〉が批判の眼に曝され、理性を軸とした知的反省のうえに立った新しい〈習俗〉が選択される。このように〈習俗〉を地盤としつつ、理性による反省を経てもう一度〈習俗〉へと還る学問として倫理学を構想したのが勝田の「習俗と道徳」論文である。寺崎弘昭が指摘しているように、勝田は〈習俗〉—「習慣」—道徳という三つの層を想定しているのである[6]。

こうした勝田の議論は、戦後初期に発表された論文「慣習の形成」にも引き継がれ、社会慣習や法律への順応を旨とする「しつけ」という行為の考察にも生かされている[7]。

2．教育の「通念」と〈習俗〉

—大田堯の場合—

〈習俗〉という概念を教育思想研究に引き寄せて考えようとする際、教育学者・大田堯（たかし）（1918- ）の問題提起は重要である。とりわけ、大田が自らの論稿を集めて出版した『教育研究の課題と方法』[8]に収録されている1973年の論文「教育の習俗と教育学研究」[9]である。大田は次のように述べている。

---

[1] 勝田守一「習俗と道徳」『信濃教育』1939年11月号（『勝田守一著作集（第7巻）』国土社、1974年114-125頁に収録。）
[2] 柳田国男『産育習俗語彙』恩賜財団愛育会、1935年。
[3] 同上書1頁。なお、旧字体を改めた箇所がある。
[4] 勝田の〈習俗〉への注目、道徳論との関連性に関して、寺崎弘昭「勝田守一における『人間学としての教育学』」皇紀夫・矢野智司編『日本の教育人間学』玉川大学出版部、1999年81-98頁、参照。
[5] 勝田「習俗と道徳」『勝田守一著作集（第7巻）』116頁。
[6] 寺崎弘昭「勝田守一における『人間学としての教育学』」88-89頁。
[7] 勝田守一「慣習の形成」『公民教育』創刊号、1947年（『勝田守一著作集（第1巻）』国土社、1972年107-116頁に収録。）
[8] 大田堯『教育研究の課題と方法』岩波書店、1987年。
[9] 同上書251-274頁。初出は日本教育学会誌『教育学研究』第40巻第4号、1973年。

「いっそう具体的に云えば、わたくしは、産業文明のもとで、決定的に被抑圧者の立場に追いやられてしまった第三世界が、かえって保持してきた習俗などの中に、発見される人間形成のエネルギーや、わたくしたち先進的資本主義国の中にもなおかすかにその生命を見出すことができるかも知れない、そこでの被抑圧者としての民衆の自衛組織としての古い集団の中で持続してきた人間を人間にするための重い習俗の中に、現代の教育学が、改めて眼をむけていくことが、一つの大切な未来へのアプローチではないかと考えるようになっている。［アンダーラインは筆者。以下、特に断らない限り同様。］」[10]

このように大田は教育学者として〈習俗〉に改めて眼をむけることの重要性を述べている。大田はナチズム期に活躍したドイツの教育哲学者・クリーク（1882-1947）やフランスの教育社会学者・デュルケーム（1858-1917）らが〈習俗〉を含めた教育事象の考察をしたことに触れつつも、未だ検討の余地を残している点を強調している[11]。

とりわけ大田の場合、産業文明のもとで被抑圧者の立場に追いやられている第三世界の人々の〈習俗〉、また日本のような先進的資本主義国にも残存している産業化以前の〈習俗〉にとりわけ注目している。大田がしばしば使用する「習俗社会」という用語には、産業化される以前の人々の生活様式というニュアンスが濃厚に込められている[12]。

社会の産業化にともなう〈習俗〉の変容に関する大田の問題関心が鮮明に表明されているのが前掲『教育研究の課題と方法』に収録されている1979年論文「現代社会と子どもの発達」[13]である。同論文の冒頭において大田は「教育は本来もっと生活に即したものだった。動物の子を育てるにもつながるもの」であったという柳田国男の見解を紹介し、また古語辞典などを用いて「そだてる」「しつける」「やしなう」「しこむ」「はぐくむ」などの教育関係語彙が動物や植物にまでも適用されてきたことを指摘している。大田にあって人間の子育てや教育は「生きとし生けるものの種の持続の中に長くとけ込んできていた」とみるべきものであり、和語だけでなく西欧語の“nourishing”“rearing”“bring up”などの語彙に、人類の長い牧畜・農耕生活の影響が如実に反映されたものであるとの見解が提示されている[14]。

70年以上の歳月を費やして編纂され1928年に初版が出版された『オックスフォード英語辞典（OED）』[15]は、英語の用例を綿密に調査し時系列的に提示した英語辞典である。この辞典を用いて“education”の意味内容の変化を大田が辿ろうとした背景には、産業社会化による人々の〈習俗〉と通念の変化が「ことば」＝教育関係語彙に反映されていることに対する大田なりの問題関心があったと考えられる。大田は次のように述べている。

「辞典にみられることば、それも事象の通念を表すことばの意味内容の変化は、その通念を成り立たせる習俗の変化に対応しているはずである。もっとも通念の変化は実に緩慢に進行しており、その背後にある教育の習俗の相当長期間にわたるおもむろな変化に対応している。このように習俗の変化が通念を変化させ、さらにそれが教育についての認識関心に基づく概念、思想の形成に及ぶには、かなり複雑な道のりがある。」[16]

一般に普及している考え方のことを「通念」と呼ぶが、教育に関する「通念」の変化は〈習俗〉の変化に対応し、それが教育に関する概念や思想の変化をもたらすと大田は捉えている。つまり、端的に表現するならば〈習俗〉―「通念」―思想、という三つの異なる層が想定され、その最も基層の部分に〈習俗〉が位置づけられているのである。

大田の「いまの教育は動物、植物はもちろんのこと、人間の日常的な生活からも突出した、それ固有の意図で組織された制度機構化（institutionalize）された姿としてわれわれのまえにある」[17]という指摘は、人類の長い牧畜・農耕生活から産業社会へという生活様式上の大きな変化と無関係に教育を構想することはできないという認識によるものと考えられる。

大田が教育に関する「通念」を明らかにしようとした際、教育にまつわる言葉の用法に注目し『大言海』などの国語辞典や古語辞典、『オックスフォード英語辞典（OED）』、さらにはリトレによるフランス語辞典における教育関連語彙を調査したことは非常に示唆に富んでいる。大田は、イギリスの文学・文化研究者レイモンド・ウィリアムズ（1921-1988）の1966年の著作 *Culture and Society* に言及し、産業革命以後に頻繁に用いられるようになっていく語群の中に“education”を挙げている[18]。

舘かおるは「辞書は言語生活史、文化史のなかに位置づけることにより、通念への接点をもち、言語への意識化は、思想としての接点をもつ」と指摘しているが[19]、上記のような大田の研究に触発されつつ、より仔細に教育関係語彙を調査していくことが今後とも必要とされている。例えばOEDにおいては“education”概念の古層を成す原初的意味が「子ども、若者、動物を養い育てるプロセス（The process of nourishing or rearing a child or young person, an animal）」とされているが、その意味を当時の文脈に即して解明することを目指してOED

[10] 大田『教育研究の課題と方法』257頁。
[11] 大田堯『教育研究の課題と方法』258-259頁。
[12] 同上書225頁、大田堯『子育て・社会・文化』岩波書店、1993年、「第二章　習俗社会と子育て」など。
[13] 大田『教育研究の課題と方法』52-107頁。初出は岩波講座『子どもの発達と教育』1、1979年。
[14] 大田『教育研究の課題と方法』52-53頁。
[15] サイモン・ウィンチェスター『博士と狂人――世界最高の辞書OEDの誕生秘話』鈴木主税訳、早川書房、2006年45頁、参照。
[16] 大田『教育研究の課題と方法』54頁。
[17] 同上書54頁。
[18] 同上書53-54頁および註（3）（105頁）。
[19] 舘かおる「日本における『教』意識の展開――辞書にみる『教』『ヲシフ』の歴史」中内敏夫・関啓子・太田素子編著『人間形成の全体史』大月書店、1998年75-112頁、引用は78-79頁。

に例示されている用例の原典に実際にあたってみることは当時の「通念」に迫るための有効な方策である。そうした原典のひとつであるトマス・レイナルドの産婆術書などの解読が寺崎弘昭によって行われ[20]、近年では英語“education”の古層を成すラテン語“educatio”の原義をラテン語文献に辿り解明する研究作業へと進展されている[21]。これは、トマス・モア（1477-1535）やジョン・ロック（1632-1704）らの思想家がラテン語“educatio”や英語“education”に込めてきた意味を、ラテン語語彙世界から英語語彙世界への借用・流入の文脈を考慮しつつ本格的に辿り直していくことを意味している[22]。

3．教育学事典における〈習俗〉研究の概観

主に1970年代に始まった、大田堯による教育の〈習俗〉研究に関する問題提起を受けつつ、近年の教育学関係の事典類には〈習俗〉に関する記述がみられるようになっている。

まず、参照しておきたいのは、大田堯が中内敏夫（1930- ）や民間教育史料研究会のメンバーともに編纂した『民間教育史研究事典』[23]（1976年）である。この事典では、「習俗」という項目は「柳田国男」、「若者組」、「こやらい」といった項目を説明する際に多く用いられ、12箇所で使用されているものの「習俗」という項目は立てられていない[24]。

これに対し、青木一らが編纂した『現代教育学事典』[25]（1988年）では「習俗と教育」という項目が立てられている。この項目の執筆者である中江和恵は、日常語としての〈習俗〉が「慣習」とほとんど区別されないとしながらも、一時的な流行や、個人的な行動の繰り返しである習慣と〈習俗〉を区別している[26]。

また、アメリカの社会学者サムナーによる造語“Folkways”の訳語として〈習俗〉が用いられる場合もあるとされ、「慣習」や「モーレス」という語との関係での“Folkways”の位置づけが紹介されている（表1）。

サムナーの分類法で「フォークウェイズ」は、強い強制力が加わらない社会生活上の行動様式とされ、「モーレス」は個人の行動に対して強い規制力をもち、社会秩序の維持にかかわるとされている。中江は、こうしたサムナーの分類法を紹介しながらも「両者の差異は程度の問題であり厳密なものではな」く、「日本語の用法としては、モーレスは習俗にふくまれる概念と考えられる」としている[27]。〈習俗〉は「法のように国家権力を背景とした強制力をもたないが、社会や地域のおきてとしての義務づけと道徳的義務づけという二重の力をもって人間の行動を規制している」というのが中江の見解であり、〈習俗〉の「拘束力」に注目した勝田守一の見解に通じるものがあると考えられる。

また、中江は、妊娠、出産から始まり成年式で完了する通過儀礼も、子どもを社会に順応させる行事であり、それ自体〈習俗〉であるとしている。こうした把握は日本民俗学の祖・柳田国男が探求してきた主題であり、実際、中江は柳田の『産育習俗語彙』に言及している。

中江は、教育学研究史上での〈習俗〉への注目に関して次のように述べている。

> 「習俗は社会生活全体の無言の人間形成作用として、従来から教育社会学の重要な研究課題であった（矢野峻「習俗と教育」『講座教育社会学』第4巻、1953年）。しかし、近年になって教育史の分野で、『産育習俗語彙』（柳田国男著、1935年刊）をはじめとした民俗学者の研究成果をとり入れて、子育ての歴史および子ども史を記述する試みが始められた。これらは子どもの生活、妊娠、出産、子育ての歴史を、主として習俗に着目して明らかにしたものといえよう。また、これらに人口動態など数量的な資料を加え、教育制度、教育内容をもふくめて教育の流れを把えようとする試みがあり、教育の社会史と名づけてすすめられている。」[28]

ここで言及されている、柳田国男をはじめとした民俗学者の研究成果をとり入れつつ〈習俗〉に注目した代表的教育学者のひとりには、おそらく前述の大田堯が挙げられよう。そして、そうした大田の問題提起をうけながら人口動態など数量的な資料をも加えて「教育の社会史」へと歩を進めた教育学者は、直接名前が挙げられていないものの『新しい教育史――制度史から社会史への試み』[29]という書物を著した中内敏夫が主要に念頭に置かれていると考えられる。中内は1976年当時、東京大学教育学部に勤務していた大田堯研究室と共同で長野県飯山市において「教育習俗」の調査を行ってもいる[30]。

中内は、人口動態論を教育研究に導入する意図について「日常のなかば習俗化されている行動、普通の人びとの行動の次元」で捉えること、そして、習俗の世界を形成している「日常物質文化」を探求することの重要性を指摘している[31]。とりわけ1980年代以降、日本で大きく取り上げられるようになったフランス「アナール派」の歴史学は「社会史」ないし「歴史人類学」と呼ばれ[32]、「長期波動」の視点から人々の〈習俗〉の解明に寄与

---

[20] 寺崎弘昭「教育と学校の歴史」藤田・田中・寺崎『教育学入門』岩波書店、1997年108頁、参照。
[21] 寺崎弘昭・周禅鳴『教育の古層――生を養う』かわさき市民アカデミー出版部、2006年71-81頁。
[22] ラテン語“educatio”の使用に関して、例えばトマス・モアの場合、“mores”＝「生活風習」や“virtus”＝「徳」をめぐって組織される「しつけ」を意味していた。寺崎弘昭「モア――ユートピアと教育」宮沢康人編『近代の教育思想』三訂版、放送大学教育振興会、2003年35-46頁。
[23] 大田堯・中内敏夫・民間教育史料研究会編『民間教育史研究事典』評論社、1976年。
[24] 同上書の事項索引583頁。
[25] 青木・大槻・小川・柿沼・斎藤・鈴木・山住編『現代教育学事典』労働旬報社、1988年。
[26] 同上書396頁。
[27] 同上。なお、筆者は〈習俗〉に対応する英語として、幕末・明治初期の用例に倣い、とりあえず“customs”をあてておく。
[28] 同上書397頁。
[29] 中内敏夫『新しい教育史――制度史から社会史への試み』新評論、初版1987年、改定増補版1992年。筆者は改定増補版を用いる。
[30] 同上書13頁。
[31] 同上書73-74頁。
[32] ジャック・ルゴフ他『歴史・文化・表象――アナール派と歴史人類学』二宮宏之編訳、岩波書店、1992年、参照。

してきた。また、「日曜歴史家」としてアカデミズムの外から、この「社会史」「歴史人類学」に合流してきたアリエスの『〈子供〉の誕生』[33]の翻訳・紹介などによって〈習俗〉を捉える方法は大きく広がり進展を遂げたと言えよう。

細谷俊夫ら編『新教育学大事典』（1990年）においても「習俗」という項目が立てられ、その概念、歴史、問題点と課題が述べられている（園田恭一執筆）[34]。ここでも柳田民俗学の影響やサムナー社会学による〈習俗〉理解のほか、法社会学者・川島武宜による説が紹介さている点が興味深い。川島は「命令的 imperative であること（規範性と言ってもよい）、一様 uniform であること（人々の行動が同一の様式にしたがうこと）、普遍的 universal であること（当該の社会集団の中で大部分の人々がこれに従うこと、不変 invariable であること（時間的に一定の行動様式が継続して存在していること）」が〈習俗〉の特徴であるという見解をとっている[35]。命令的であること（「規範性」）という特徴は、「拘束性」という言葉で〈習俗〉を捉えようとした勝田守一と重なり合う問題関心であるが、「不変であること」という川島の指摘に関しては、長期の波動においては緩慢ながらも〈習俗〉は変化するという視点へと現在では修正される必要があると考えられる[36]。

教育思想史学会編『教育思想事典』（2000年）にも「習俗」という項目が立てられ、その語義、社会思想や教育との関連性が検討され、参考文献が紹介されている（北本正章執筆）[37]。西欧語における〈習俗〉は、英語の場合“folkways”、ドイツ語では“Sitte”、フランス語では“moeurs”である。「人々が社会生活を送る上で意識的・無意識的に、その属する社会集団の伝統的なエートス・規範にしたがう反復的な行為」というのが〈習俗〉の語義であり、古くはフランスのモンテスキュー（1689-1755）が『法の精神』（1748年）で言及し、〈習俗〉が法や制度ほど強制力は強くないが、集団によって支持され人間の行動や内面を規制すると指摘し、〈習俗〉と社会思想との関係性に言及している。〈習俗〉と教育との関係性に関しては、大田堯の1973年論文と同様に、教育社会学者デュルケームが〈習俗〉に言及している点が紹介されている。また、フランスの社会学者レヴィ＝ブリュールが「習俗科学（science des moeurs）」なる学問を提唱していた点は非常に興味深い。

筆者は現在までのところレヴィ＝ブリュール（1857-1939）による「習俗科学」に関しては未検討であるが、この人物とほぼ同時代に生きたフランスの社会学者ポール・ビュロー（1865-1923）の著作『習俗の無規律（*L'indiscipline des moeurs*）』（1920年）を検討したことがある[38]。その際、フランスの“moeurs”の語源について辞典等を調査し、この語がラテン語“mores”やギリシア語“ethos”に由来する非常に古い伝統をもつ言葉として、教育思想の研究に重要な示唆をもつ言葉であることを再認識するに至った[39]。マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の岩波文庫版「訳者解説」において大塚久雄が、「エートス（Ethos）」という語はドイツ語でしばしば「エーティク（Ethik）」と言い換えられるとし、「社会の倫理的雰囲気」として「エートス」を捉えていた[40]ことも想起される。

結語

幕末・明治初期における西洋文化・文献の移入とともに西洋文献中の英語“education”の訳語として「教育」という語彙が日本に定着し、また、ペスタロッチ、ヘルバルト、ルソーなどの教育思想が紹介され日本の教育界に大きな影響を及ぼしたことからも、西洋の教育思想を下支えした「通念」と〈習俗〉の解明が望まれる。ルソーが『エミール――あるいは教育について』（1762年）において、「教育（éducation）」の古代における意味が「養うこと（nourriture）」であったと指摘し、〈産〉〈育〉〈訓〉〈教〉の区別・関連・意味変容を論じた背景にも教育思想と〈習俗〉との相互関係への着眼があったと考えられる[41]。

本稿では、　勝田守一や大田堯の著作、教育学関係の事典類を素材として、〈習俗〉への注目を教育思想研究に引き付けて再検討してきたが、今後、以下のような点に留意しつつ教育思想と〈習俗〉という主題を掘り下げていく必要があるだろう。

第一に、〈習俗〉は社会生活の地盤であり、個人の習慣や知的営為を規定する基層を成しており、しかも個人が〈習俗〉に反抗する際には社会慣習や法律に同化させようとする「拘束性」を有しているという点である。

第二に、〈習俗〉は、人々の「通念」や思想の変化をも生じさせる基層に位置する。そして、例えば、牧畜・農耕生活から産業社会へといった生活様式の変化が〈習俗〉の変化に大きな影響を及ぼす。

第三に、〈習俗〉を鍵概念として教育思想を考察する場合には、「日常物質文化」を明らかにしようとしてきた学問、とりわけ民俗学、人類学、歴史学などの成果を取り入れる必要がある。また、文献・辞典類を素材とした教育関係語彙の考察を含めた幅広い言説分析によって人々の「通念」を解明し、〈習俗〉のあり方と突き合わせていくことが重要である。

---

[33] Ariès, Ph., *L'Enfant et la Vie Familiale sous l'Ancien Régime*, Plon, 1960,（杉山光信・杉山恵美子訳『〈子供〉の誕生』みすず書房、 1980年）

[34] 細谷俊夫ら編『新教育学大事典』第一法規出版、1990年39-40頁。

[35] 同上40頁。川島武宜『法社会学』上、岩波書店、1958年。

[36] 周知のように川島は戦後直後に「イデオロギーとしての『孝』」「イデオロギーとしての家族制度」といった論稿を発表し、戦前の家族制度への批判を展開した論者である。〈習俗〉が不変であるとするならば、〈習俗〉として営まれる家族生活も不変ということになってしまわないだろうか、疑問が残る。川島武宜『日本社会の家族的構成』岩波書店、2000年、参照。

[37] 教育思想史学会編『教育思想事典』勁草書房、2000年369-371頁（北本正章執筆箇所）。

[38] 拙稿「〈家族の習俗〉とアソシアシオンの道徳論」『地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）』第6巻第2号、105-116頁。

[39] O. Bloch et W. von Wartburg, *Dictionnaire étymologique de la langue française*, PUF,2002, p.413.

[40] マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、岩波書店、1989年387-388頁。

[41] ルソー『エミール』（上）、今野一雄訳32頁。

課題は多いが、人々の心性の変化を「長期波動」の視点から捉えようとしてきたフランス「アナール派」の歴史人類学やアリエスの『〈子供〉の誕生』の翻訳・紹介などによって〈習俗〉を捉える方法は大きく広がりをみせており、〈習俗〉に定位しつつそれが教育思想をどのように規定し枠づけているのかを明らかにしようとする視点が今後とも重要であろうと思われる。

表１　サムナーによる〈習俗〉関係概念の分類

カスタム（custom, 慣習）── フォークウェイズ（folkways, 習俗）
　　└── モーレス（mores, 道徳的慣行、良俗）

出典：青木・大槻・小川・柿沼・斎藤・鈴木・山住編『現代教育学事典』労働旬報社、1988 年、396-397 頁。

表２　教育学事典における〈習俗〉

事典名	出版社・出版年	執筆者	〈習俗〉の語義
『現代教育学事典』	労働旬報社・1988 年	中江和恵	ある一定の社会集団が共有する生活様式、行動様式の全体で、集団の成員が日常的に繰り返す生活行動のなかから歴史的に形成されたもの。
『新教育学大事典』	第一法規出版・1990 年	園田恭一	社会の成員により永年受けつがれ、ある種の約束力をもっている行動様式。
『教育思想事典』	勁草書房・2000 年	北本正章	人々が社会生活を送る上で意識的・無意識的に、その属する社会集団の伝統的なエートス・規範にしたがう反復的な行為。